

2022年 2月27日

礼拝説教要旨 詩篇3篇

「救いは主にあります」—影から光へ—

北海道聖書学院本科3年 國安洋子

序論：ダビデの光と影

詩篇3篇の表題には、「ダビデの賛歌、ダビデがその子アブサロムから逃れたときに」とある。これは、ダビデの晩年に息子アブサロムがクーデターを起こし、彼に命を狙われた出来事を指している。この時の事情は、第2サムエル記15章から17章に書かれており、結果的にダビデはアブサロムに勝利し、再びエルサレムに戻って王として国を治めるが、自分の息子に命を狙われるというこの出来事は、彼の生涯の中で最も暗い影のひとつであった。

スイスの心理学者であるユングは、この「影」シャドウという言葉を使った。彼は、人間が自分の中にある暗い影の部分に気づき、それに向かい合っていくことをシャドウワークと呼び、そのシャドウワークを通して、人間はより創造的、クリエイティブな存在になっていけるのだと言った。その創造性とは、物事の柔軟な見方や考え方で人生を変革していく力を持つということ。神様が聖書を通して私たちに教えていることは、まさしくこのようなことではないだろうか。

私たちもまた、時折ダビデのように人生の「影」の中を通らされることがある。人間関係や経済的困窮、病気、老い、様々な試練。今私たちが経験しているコロナ禍もその一つ。しかし一番深い影は、私たちの内にある「罪」の問題ではないだろうか。神様は、私たちがこの「罪」に真摯に向き合う時に、恵みをもって臨んでくださり、私たちと私たちの人生を造り変えてくださることを、聖書は教えていてくれる。この詩篇3篇にも、そのような神様の恵みが示されている。今日はこの詩篇を通して、ダビデがどのように神様に祈り、どのように神様の恵みをいただいて人生を立て直すことが出来たのかを教えていただき、私たちもまた、新しく生きる力、人生を変革する力を与えていただきたい。

本論：影から光へ

①ダビデの影

1節：ここで「敵」と訳されている言葉は、「狭い」とか「きつい」とも訳せることば。協会共同訳では、その意味を取り入れて「主よ、私の苦しみのなんと多いことでしょう。」一国の王としての苦勞、老いから来る肉体的な衰えや家族の悩み、さらに今は、血を分けた息子に背かれ命を狙われるという苦しみ。

2節：しかし、ダビデにとっての本当の苦悩は「彼にはもう神の救いがない」と言われること。ダビデは、それは自分の罪のためであることを自覚していたので苦しんだ。

②ダビデの悔い改め

3節：「しかし、主よ。」この詩篇でカギとなる大切な言葉。ここでダビデは、神様に、「私の盾、私の栄光となってください、私の頭を上げてください」とは祈っていない。あなたは今までずっと、私に対して盾であり栄光であってくださった、私の頭を上げて下さった、という主の恵みと真実を告白している。出エジプト記34章6節で証しされている主の恵みと真実を体験的に知っていたダビデは、その恵みと真実にもう一度すがろうとして、4節にあるように「声を上げて主を呼び求め」ている。

私たちは、自分が罪を犯してしまった時、またそのせいで窮地に陥った時、「神様は私に愛想

をつかしてもう赦してくださらないだろう、もう助けてくださらないだろう」と思ってしまうことがないだろうか。私たち日本人は、「因果応報的」な価値観の中に生きているので、知らず知らずのうちにそのような思考に陥ってしまうことがある。しかし、信仰は、自分を見つめて失望、落胆するのではなく、私たちのために命を捨ててくださりよみがえってくださった主の恵みと真実を「どこまでも信じて仰ぎ見ること」である。【証し】

私たちも、ダビデのように何度でも神様のあわれみにおすがりしよう。私を赦し、助けてくださいとお願いしよう。その時、ご聖霊が内に働いてくださって、私たちの心に赦しの証を与えてくださる。

4 節：「すると、主はその聖なる山から私に答えてくださる。」ダビデもまた、「わたしはあなたの罪を赦した」という主の答えを心のうちに聞いたのだ。

③ダビデの安息

5 節：主に許された平安の内に安息する姿。「身を横たえて眠る」ということは、本格的に眠るということ。ダビデが置かれていた状況はいつ敵が襲ってくるかもしれない状況、眠ったとしても常に戦闘態勢がとれるように座ったままで仮眠をとると考えるのが普通。しかし、この表現は、手足を伸ばしてぐっすり眠ることを表している。おそらくダビデはこの時まで、不安と恐れのために幾晩も眠れぬ夜を過ごしただろう。ダビデがその不安と恐れから解放されて、ぐっすりと眠ることができたのは「主が支えてくださるから」という信仰が与えられていたから。

6 節：ダビデの置かれている状況は、何一つ変わっていない。幾万もの敵は相変わらず彼を包囲している。しかし、ダビデはもう彼らを恐れてはいない。それは、罪赦され、再び主との愛の交わりの中に回復された私を、主が支えていてくださるという信仰から来る平安が与えられていたから。

私たちを本当に支えるものは何なのか。人生において私たちが試みに遭うのは、「お前は本当にわたしを信じているのか」と、神様から問われるためではないだろうか。神様を信頼することにおいて成長させていただくためではないだろうか。どんな時も主を信頼し、主からいただく安息の中に生きる者でありたい。

7 節：ダビデは、今はもう深い信頼と平安の中にいる。そしてあらためて「私をお救い下さい、私のすべての敵に報いてください」と祈っている。すべてを主に委ねているからこそその祈り。私たちもダビデのように、自分の問題について主にお委ねしたあとも祈り続けよう。

④ダビデのとりなし

8 節：ここで言われている「あなたの民」とは誰のことか。ダビデ自身のことでもあるが、ダビデが王として神から託された神の民、イスラエルの民を指すと考えられる。であるなら、今自分に反逆し、敵となっている者たちも含まれることになる。7 節で、立ち上がって私の敵を打ってくださいと祈ったダビデが、8 節では、彼らの祝福を祈っているのは何故か。このことを理解するカギは、「救いは主にあります」という信仰告白。ダビデは、主が与えてくださる救いの確かさを経験した時、「自分を憐れんでくださるお方は、私の敵をも憐れまれるお方なのだ」ということに思いが開かれ、その主の憐れみをもって、自分の敵をとりなす者へと変えられたのである。この恵みに生かされること、これこそが人生を変革していける力ではないだ

ろうか。この恵みに生きる人は、どんな苦難にあっても倒れることはない。むしろ、倒れ掛かった人を助けることができる力を持つ。

結論：救いは主にあります

今日私たちは、苦難の中でダビデが祈った祈りから、二つのことを教えられた。一つは、「救いは主にある」と信じて、光であられる主の前に自分の罪を告白するなら、憐れみ深い主はその罪を赦し、私たちを主へのより深い信頼へと導いてくださり、その信頼の中で安息する者としてくださること（ヨハネ第1の手紙 1:7）。もう一つは、「救いは主にある」と信じて主の救いに与った者は、敵をも愛することが出来る者へと変えられるということ（エペソ 5:13,14）。私たちは、栄光から栄光へとイエス様の似姿に変えられていく（第二コリント 3:18）。イエス様のように人を赦し、愛することができるようになる。まさしくこれこそが、私たち自身が変わられ、人生を変えることのできる力である。

影を抱えたままで、罪を抱えたままで、そのあなた自身をまるごと神様にお委ねするなら、神様はその罪を赦し、ダビデのように、自分の敵のためにさえとりなして祈ることができる者へと造り変えてくださる。そのことを信じて、これからも神様の光の中を歩む者とさせていただきたい。